

第5回（仮称）新武蔵野クリーンセンター施設まちづくり検討委員会

議事要録

日 時	平成 20 年 11 月 27 日（木）18：30～21：13
場 所	クリーンセンター 3 階 見学者ホール
出 席	寄本勝美委員長、田村和寿副委員長、早川峻委員、越智征夫委員、石黒愛子委員、広江詮委員、橋弘之委員、金子和雄委員、佐々木保英委員、前川智之委員、村井寿夫委員、事務局（環境生活部環境政策担当部長、クリーンセンター所長他）傍聴者 12 名

委員長 : 副委員長よりご意見があるということですのでどうぞ。

副委員長 : 2つの小委員会を設けそれぞれ積極的なご意見が出されている。それを受け本委員会が何をするのか。まず建替えの必要性について、プラント修復だけにするのか建て替えをするのか財政面からすると非常に大きな問題。この件に関しては、多いに議論をするべきではあるが、我々は建て替えを前提に話を進めていくべきであると考え。議論すべきではないということではなく、建て替えで進むということの正当性を論証する立場にあるのではないかと思う。建て替えの議論を進めながら、その過程でコストを最小限にしていくこと、規模・機能が小さければプラント修復で済むこともある。建て替えかプラント修復かというのは、財政面で考えるか都市計画で考えるかもっと大きなグラウンドすべき話であり、今回はまず建て替えを前提としながら議論をしていくかということ前提にしていくべきではないか。前回までの議論を受け3点。我々が出すごみ全体をトータルで考えたときに、武蔵野の基本計画をも含め議論しなくてはいけないという状況にきている。前回建設時は自区内処理が前提にあり、土地の選定から始まり市民参加でかなりつつこんだ話し合いがおこなわれたが、今回はトータルなごみ処理というなかで、どんな焼却場を我々は望んでいるのか、造れるのかという問題に変わってきている。ごみ問題全体を考えそのなかで焼却場をどう捉えるか。ごみ問題全体を考えごみ減量の問題、リフューズを含めた4Rの問題、その中で焼却、非焼却の技術の役割。きちんと状況認識をした上で、本当に焼却しなくてはいけない物はどういう範囲の物なのか。施設小委員会のレポートを見るとある程度の目途はつくであろうが、30年を見通してもはっきり正確なことが言えるわけではないが誤差をどれだけ小さく出来るか。これが一番目の問題である。二番目の問題として、ごみ処理の安定性ということが前回技監の話で公の役割であるとあった。安定的な公の問題とまだ将来的にどうなるかわからない

技術との兼ね合い。三番目は、小委員会で考えたものが即答えになるようなものではない。市民参加をベースに話しており、あくまで課題の構造を見えるようにすること。広報小委員会の役割はセンターのあり方の広報、将来どうあるべきかを市民が参加していくためのメッセージとして発信していく。施設小委員会は30年後を見越し状況全体を読んで技術的な問題、予測し選択していくのか、それを市民の側からエンパワーメントしていく機能を持っているのではないか。

1. 広報計画

委員 : 広報小委員会について。まず30年前の生みの苦しみを思い起こす。それが全市民的に認識されて初めて建て替えの問題がでてくる。ただ単純に30年経ったから建て替えなくてはならないというだけではない。当時の心情を思い起こしてもらいたい。緑町地区、北町五丁目地区以外の市民の方々は、当時この苦しい思い入れを持たないうちにクリーンセンターが出来てしまった。これではいけないのではないか。もう一度、昭和46年当時のものを思い起こした記事にしてはどうかということで、第一面に持ってきた。デザインは任せるとして訴求力のあるもの。来年1月15日市報として出していこうと。プラントの修復なのか建て替えなのかという視点はまだ入っていない。コミュニティセンターを利用して勉強会でやろうという計画。委員会も各コミュニティセンターでおこなう。

委員 : そもそも市報は誰が見るのかとなった。見るヒトがどういうヒトなのかを的確につかまなければ意味がない。誰に訴えかけるのか、何の為なのか、何を期待しているのか、という点をはっきりさせる。ごみ問題をどうすべきかなどもう少し大きい将来的な話にしてはどうかという話もあった。情報が多く絞り込めていない。違うインパクトの与え方でもいいのかもしれない。

委員 : センセーショナルな表現をしていこうという中で、建て替えはお金がかかるということ。もし建て替えをしなければどういうことが起こるのか。二枚橋は稼働停止になっている。時代が変わってごみの質が変わっている。法律も循環型社会に進んでいこうとなっている。このままの施設では地球に優しくない。そのようなことを訴えるキャッチフレーズ的なものを入れては。クリーンセンター周辺住民の負担を酌むような内容があるとありがたい。

委員 : ごみ量の推移が昔の広報にはあった。59年当時から分別がどう変わって組成がどう変わったか。エコセメントが出来て灰の処分がどうなったか。事業系がどうなっているか。現実を知るということがまだ足りないのでは。

委員 : 市のごみ減量協議会が今動いている。当面の目標の「チャレンジ700グラム」がある。建て替えの時期には680グラムくらいになるかという想定をしてい

る。それによって何炉が適切なのかも想定している。ごみ量はクリーンセンターが出来る前3万トンだったのが5万トンになっている。

委員 : 昔はこうだったというのを伝えるのに、ごみがすべて自区内処理ではない。それをうまく伝える方法があるのか。

委員 : 基本計画で将来の予測は引いている。それが680グラムである。事業系にしても大規模事業所はやっているが、中小もこれからやっていく。

委員 : ごみの質、ごみの減量というのはここでやることなのか。知っておく必要はあるが、ごみ総合対策課がやるべきで、この施設をどうするのかという与えられたことを基にやるべきなのではないか。

委員 : ごみ総合対策課と連携しどういうことをやっているかを把握した上でやる必要があるという話は広報でも出た。すべてをクリーンセンター特集号で知らせることは無理。

副委員長 : 2つの点でごみ問題にも触れなければいけない。焼却にどれだけのごみをもっていくかはクリーンセンターの前提になる。もう一つは焼かないリサイクルなどするごみも施設でやることが考えられる。焼くごみだけではなく、それ以外のごみにも光を当てておかないと施設のイメージが出てこない。広報はもう少し冷静さを失ってもよいのでは。寿命が来ているという事、そうすると何が起こるのかははっきり書いたほうがいい。

委員長 : 資源ごみの価値が落ちて経済の状況が反映されている。変動を読むことは難しい。

委員 : 全く知らない人がこれを見てどう感じるのでしょうか。一面に昔の事を持ち出すのは懐古的である。何を訴えたいのかわからない。建替えの必要性を理解してもらいたいのであれば、それを一面に出すべきではないか。

事務局 : インパクトのあるものという話であったが、絵の出典などはっきりせずオーソドックスなものにしている。組み直して小委員会で諮っていきたい。

事務局より、西久保コミセンでのコミセン勉強会の案内。

委員 : もう少し具体的に書かないとなんなのかなというだけで捨てられてしまう。

委員 : 三多摩の処分場の内容の時に過激だということでボツになったことがあった。そういうことがないように。委員に非難がくるようなところを覚悟してやれば伝わるのでは。

事務局 : 委員会で検討されたものをそのままあげていこうと考えている。

委員長 : きちんと正確な情報が出せるように把握しておかないといけない。

事務局 : ごみ総合対策課の方とも調整していきたい。コミセン勉強会については月1でやっていくのでタイミングによって市報にも載せていく。

- 委員 : 前の市報の内容とテーマが異なる。コミセンには建て替えを前提でテーマ説明をしていくのか。順番が合わない気がする。いきなりコミセン勉強会のチラシが来て何だということにならないか。
- 委員 : 案内はどこにするのか。
- 事務局 : まずコミセンの役員さんなりコアな方に聞いてもらい、できれば次の回に違う時間帯でやることを考えている。
- 委員 : 新聞なり市報なりは見ずに捨てられる可能性があるためコミセンを使ってやっってはということで計画した。12月8日に西久保でコミュニティ研究連絡会をやるためそこで配る。運営委員を中心にヒトを集めてもらおうと思う。運営委員はオピニオンリーダー的なヒトが多い。
- 委員 : やることは重要。意見も出てくる。それも反映していけるといい。
- 委員 : 運営協議会でも全地域の市民一人ひとりが考えないとダメということで話している。有料化やプラ焼却の際にも全地域でやってそれでも行き届いていないところはあるが、こういうことをしていくのが必要。
- 委員 : 各地のコミセンに行くのに困るのが足。時刻表を乗せてもらうといい。
- 委員 : 委員会の検討項目など書かなくてもいい。
- 委員 : 建て替えとなった時にどこにという話になる。外観を見るとまだまだ建て替えの必要はないと思われる。
- 委員 : 集団回収のニュースを毎月出しているがその中にこの問題を出してみた。まだ反応はないが、周辺住民が大変な思いをしていることを書いた。他にもニュースを出されているところがある。そういうところを活用しPRしていつては。

2. 施設研究

- 委員 : ごみ処理基本計画策定指針を配布している。処理方式についての勉強会ということで、課題の抽出、提示を行う際のポイントが整理されているので紹介した。この中に、ごみ処理の方式、流れをごみごとに区分し、各々の特徴が述べられている。国が認めているものだけだが、これ以外を採用しようとすると説明付けにかなり時間がかかる。この中で、処理方式については可燃ごみの処理を重点的に勉強した。その他に気がついた点は、生ごみの処理方法について、全量処理は難しいようだが、部分的実証レベルで採用可能かと感じた。
- 事務局 : 小委員会の説明資料から策定指針の体系に組み替えている。現行の処理システムではクリーンセンターは中間処理施設であり、他所の施設で行っている自区内処理できていない部分も多々ある。

事務局より、資料「処理方式の紹介」の説明。

事務局 : 次回ごみの量的なところも提示したい。小委員会で広域処理の話も出た。エコセメントは広域の最たるもので非常に効率がいい。その裏返しとして組合から脱退できない。

委員長 : 乾電池の回収率は低いのではないか。関東にあればいいが北海道に持っていくという非効率なことをしている。

委員 : いくつか課題が出ていて、この委員会で解決するのか、解決できないこともあると思う。課題の整理の仕方。課題ですと市民に認識してもらうことも重要。この会議で検討が必要な事項はなにか。

委員 : こういう処理技術というのは、どれくらいの寿命があるのか。30年先を見越すのに。

委員 : いろいろな大きさのものがあ構成するものも違うが、基本的に回転する部分の磨耗の寿命、鉄板だったら腐食の寿命が一番効いてくる。それが一つの目安となる。プラントであると20年から30年程度。焼却炉などは鉄板中心に出来ているが、全面が腐食し、部分的な交換のみでの対応が、技術的にも、費用面でも対応が難しくなってくるのが目安になる。

委員 : 三輪部長にお聞きするが今の施設を作ってこれまでの経験で実感として感じられるところがあるか。

部長 : 作った当時は厚生省の考えでは17年というのがあった。17年経つとまた補助金がもらえるということになっていた。都市部はしっかりした建物にして20年、東京都などは30年もたせてきた。大きく変わったところは排ガスの処理がダイオキシン対策で変わった。また制御・計装のパソコンはかなり変わっているはず。電気関係は一度も変えていない。

委員長 : リサイクルにはお金がかかるといわれるが、電池の工場に聞いたが、電池のメーカーは再生工場にデータを出さない。その情報があれば再生しやすいが何が入っているかを教えてくれない。自治体の責任というよりは国がやるべき話。

委員 : センターを作るときに機種を何にするかというときに溶融炉を考えていたが補助金が出なかったため今の施設になった。先進的なものを追いかけていた。ここには載っていないが亜臨界の処理が研究段階だが、ガス化溶融が20何年かけて今ようになっており、将来的にはこの方式がそうなるのかと思う。また加水分解というものもある。これも実証段階で実用可能かわからないが。割と新技術の開発はごみについてはゆっくり。壊れたからこの週はごみが出せないとなっては困る。よくまとまっている。

委員 : おそらく建設当時、国が策定した「ごみ処理施設の構造指針」があった。54

年当時、そこで対象となっているプラント以外は指針外の施設として協議し、国の審査を受けなければならなかった。長期的な安定稼働の実績データがなければ審査してもらえなかった。シャフト式ガス化炉が初めて実用された時期と重なる。実際の炉で稼働の実績を上げるまで時間がかかった。稼働中の維持管理まで含めて、その方式の良し悪しが確認されたことになる。炉の更新の時期になって、ようやく評価され、同一方式が再び採用されている。最近、他の自治体でも、資源化、処分場の確保に問題意識がある所で採用されている。武蔵野市の場合、焼却灰を三多摩組合でセメント化することで進んでいることもあり、現状で最適と言えないのではないかと。

委員 : ガス化溶融の可能性があったのにストーカにしたというのは後悔しない程度の話なのか。誤差を最小にするために、今考えられるマキシマムが必要なのか。

委員 : 武蔵野のような成熟した市街地では採用できないという判断だったのでは。また、今回は灰の処理がエコセメント化されているので、処分場確保に関する、灰溶融の優位性はないと思う。具体的に検討する際には、止まった時の対策として、ピットの要領、近隣自治体との非常時の協定など、二重、三重のバックアップの方法を考えるのが通常的设计である。また、それを考えていないのであれば、公共施設として受け入れられないと思う。

委員 : 小委員会で思ったのは、武蔵野市の量で全量やるコストと広域でやる時の効率とコストは、出来る出来ないではなくて抑えておかないと、そういう話も出てくるのでは。

委員 : コストの問題が出たが、周辺住民の命には代えられないということで運転維持管理にはかなりお金をかけてきた。そのコストを削ることは出来ない。

委員長 : 物をつくる技術はヘッドライト、ごみを処理する技術はテールライト。紙から作る燃料などいろいろな技術があり使うところがあれば割とうまくいく。

事務局 : 三鷹と武蔵野では建てた時期、規模が全く同じ。それなのになぜ維持費が高いかというこの立地にある。何かあっては困るということでかなりコストをかけてきた。広域の場合に当時もいろいろ考えたがデメリットとして収集運搬の距離が大きく影響してくる。

副委員長 : 今話しているようなことを今後市民もネタにして議論できるようなあり方の提案が少しずつ見えてきたのでは。そういうイメージを作っていただきながら話していければ。

委員長 : 三鷹はまだ有料化していないが武蔵野はしている。27市のうち18市は既に有料化している。

委員 : 委員会の名前が施設まちづくりになっている。小部会で技術的なことをやってきたが、清掃工場全体で見た時にプラント以外にも技術がある。まちづく

りを考えた時に電気関係、計装関係、排ガスのモニタ、運転状況の監視など。このへんの技術論をまだしていないが、もう少ししたほうがいいのではないか。それによってまちづくり全体に関わってくる。建物の意匠であるとか外構植栽など。

委員長 : ごみは減らせるが、し尿は減らせない。ごみの施設にし尿の汚泥も入っていた。ごみ処理施設の整備にあたりまちづくりを語れるのはいい時代になった。

了 (午後9時13分)